

## 第8回日本集中治療医学会総会印象記

北里大学医学部麻酔科 剣物 修

第8回日本集中治療医学会総会が昭和56年2月7日、8日の両日にわたり、神宮球場前の日本青年館において開催された。参加者は医師、看護婦あわせて1,500名にのぼり、3つの会場に分かれて教育講演、自由討論会、および一般演題発表などが行われた。

### 1. 教育講演、特別講演、会長講演など

教育講演は、1) 消化器外科領域における重症患者の諸問題、2) 長期人工呼吸管理での気道確保の諸問題、3) 血管作動薬の臨床薬理、4) ICUにおける脳出血患者の管理看護、の4題であり、いずれも日常のICUにおける患者管理のうえに参考になるものであった。このなかで、もっとも印象的であったのは橋本虎六氏による「血管作動薬の臨床薬理」で、血管平滑筋に対する種々の薬物の作用に基づく血行動態の変化、 $\alpha$ -、 $\beta$ -受容体の考え方、 $\alpha$ -、 $\beta$ -遮断薬のこと、など臨床医にとっても理解し易いものであり氏の長年にわたる研究成果のにじみ出たものと感じられた。ただ、看護婦にとっては若干むずかしかったようである。山村秀夫氏による「心肺蘇生法の新しい考え方」と題しての特別講演もユニークなものであった。AMAの推奨する心肺蘇生法も変えられる可能性があること、患者自身が咳をすることで、心室細動時に脳血流が維持されるという「咳による蘇生法」が誠に印象的であり、会場で思わず「咳」をする人がいて講演をいっそう盛り上げていた。会長講演の「ICUにおける特殊疾患患者の管理」では重症筋無力症、ギランバレー症候群、頸髄損傷がとりあげられ、長年にわたるICU管理の経験から自験例を紹介しながらの説得力のあるものと感じられた。パネルディスカッション「集中治療室におけるモニター・治療機器の問題点とその改良」、シンポジウム「意識障害の評価方法」がもたれ、後者での「3-3-9度方式」が世界を駆けまわる日本車のように、いつか国際的に評価される日がくることを望む」といった発表が記憶に残っている。

### 2. 一般演題

193の演題が発表された。その内訳は循環(53)、看護(44)、患者管理(31)、呼吸(20)、特殊疾患(17)、shock・DIC(11)、新生児・小児(11)、検査・モニター(6)、である。研究会であったところは症例報告的なものが大部分を占めていた一般演題も、今回の学会ではかなりレベルが高いものになってきていると感じさせられた。この学会の特徴のひとつは学会場が「香水の香り」がすること、つまり看護婦の参加が多いことである。今回も一般演題の1/4は看護婦による発表であった。会場のそちこちでメモを取る彼女らの姿が目についた。ICU・CCU看護に対する熱心な態度を感じたのは著者だけではなからう。循環の部では開心術後の患者管理や心筋梗塞の治療における血管拡張療法の演題が多く、とくにニトログリセリンについての発表が目立った。この薬物はその臨床使用はいまだ認可されていないが、応用範囲の広い血管拡張薬として期待されるもので、臨床使用が認められる日の早からんことを切に望む一人である。特殊疾患のセッションで、破傷風患者の管理におけるバルビツレート的大量使用、また新生児重症脳障害に対するペントバルビタールの大量投与の報告が関心をよんだ。日本救急医学に「バルビタール使用検討委員会」が発足したところであり、今後の臨床検討が望まれる。

### 3. 自由討論会

「集中治療室入室患者へのオリエンテーションの問題点」と題してパネル的に行われていた。第2会場のホールは超満員(350~400名)であり、術前訪問、緊急入室、入室期間の変更などの立場から、日頃の研究成果が発表され、熱心な討論がなされていた。参加者はほとんどが看護婦であったが、医師側のアドバイス、CCU入室の経験談など貴重な発言があった。

閉会式で、前回会長の青地修氏が会場でいきなり起立し「会員を代表して、今回の学会の成功を祈り、会長のご努力に感謝します」と発言し、万雷の拍手をさそった。誠に好感のもてる、さわやかなフィナーレであった。